ART CAMP 2019

アートキャンプ 2019 報告書

INDEX

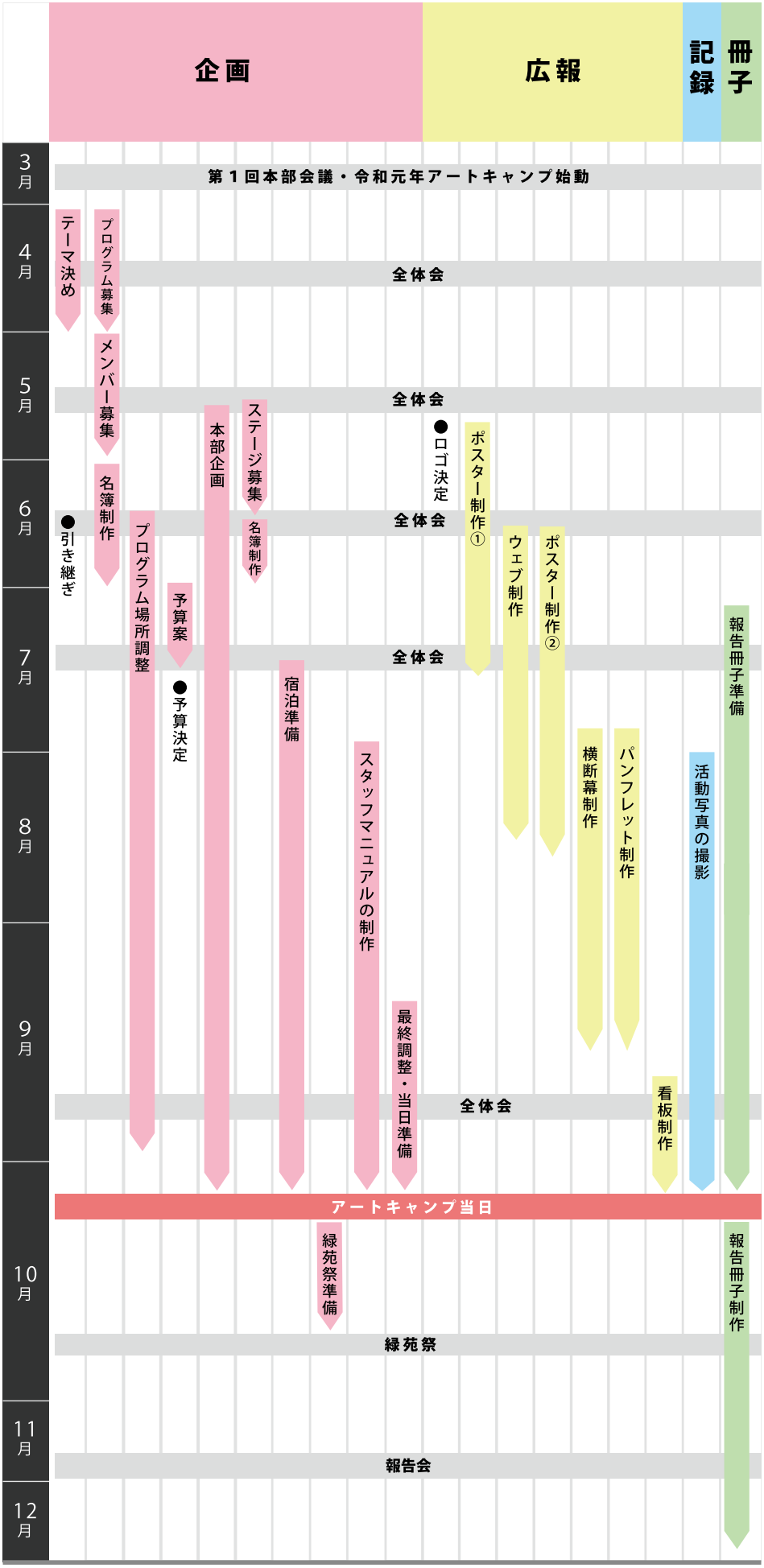
2　はじめに
3　開催までの流れ
5　本部・広報
6　インテリアデザイン／本部企画
7　ライブペイント
8　映 像
9　デジタル
10　金 工
11　しろくま
12　織 物
13　染 色
14　陶 芸
15　森のサロン
16　スペースデザイン
17　にじのかくれんぼ
18　チョークアート
19　カラーパンケーキアート
20　フレームアート
21　森のアートクリニック
22　トリックアート
23　cocoon（コクーン）
24　レシートアート
25　服飾美術学科／芸術学ゼミ
26　付属中・高／アートキャンプガイド
27　炊き出し
28　ステージ発表
29　当日の写真
30　おわりに
31　報告書制作を振り返って

はじめに

「板橋アートキャンプ 2019」は「自然」というテーマを掲げ、本学造形表現学科学生が中心となり多彩な企画・プログラムで行われました。新たな切り口での内容も多く出され、一人一人がアートの実現を目指して楽しみながら準備し、当日を迎えました。開催期間は悪天候に見舞われ、まさに自然とどのように折り合いをつけることができるのか、それぞれが悩み、答えを模索したと思います。
全ての過程を楽しみ、良き経験として心に刻み、関わった人との響き合いや関係性を持ったアートを実現させる、そんな実践が行われたと思います。
この冊子は、多くの思いが詰まったドキュメントです。是非じっくりとご覧ください。

造形表現学科
学科長　兼古昭彦教授

開催までの流れ


企画
広報
記録
冊子
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
第１回本部会議・令和元年アートキャンプ始動
全体会
全体会
全体会
全体会
全体会
アートキャンプ当日
緑苑祭
報告会
テーマ決め
プログラム募集
メンバー募集
名簿制作
●引き継ぎ
プログラム場所調整
予算案
●予算決定
本部企画
ステージ募集
名簿制作
宿泊準備
緑苑祭準備
スタッフマニュアルの制作
最終調整・当日準備
●ロゴ決定
ポスター制作①
ウェブ制作
ポスター制作②
横断幕制作
パンフレット制作
看板制作
活動写真の撮影
報告冊子準備
報告冊子制作

本部・広報

「楽しみ」を形に

プログラム内容

学内に掲示するポスターや当日に来場した一般の方に配布するパンフレットの制作。また、アートキャンプのシンボルマークの募集から制作などもおこなった。

プログラムメンバー

リーダー：３年　岸本彩加

米田あかり　清水香奈　松嶋静来
伏黒静流　八反田茜

制作時の様子、思ったこと

メンバーそれぞれが分担した自分の作業を空き時間などを利用し、計画的に行ってくれた。また、先生にもアドバイスをもらうことができ、おかげでより良いものを作ることができた。少ない人数で作業を割り振ったため、忙しいときもあったが、メンバーそれぞれ自分の作業に真剣に向かいあっていたと感じた。

アートキャンプを終えて

メンバーや先生、助手の方などの協力のおかげで全ての作業が期限内に終わりとても良かった。また、この作業を通じてクラスや学年を越えてメンバー同士仲良くなれたのではないかと思う。
授業や課題等で忙しいときもあったが、一人一人が責任をもって作業を進めてくれたことに感謝している。

▲シンボルマーク

制作者：松嶋静来

テーマが自然ということで、植物と生き物をアイコン風のイラストにしました。これまでのアートキャンプにはない女の子らしさと造形表現学科らしさを出したかったので、ゆるいテイストでまとめました。

▲パンフレット

▲学内掲示ポスター

▲ web ページ

自然を楽しむ小空間
インテリアデザイン

小空間に広がる思い

プログラム内容

造形表現学科3年のインテリアデザインⅠの授業課題「自然を感じられる小空間」をコンセプトに 2.4 メートル四方の立方体で、晴れている日に一泊したくなるような空間を目指した。

プログラムメンバー

全体リーダー：3 年　米澤志織

土屋クラス　代表：三浦なるみ　中島朱理
豊田クラス　代表：深谷華　米澤志織

制作時の様子、思ったこと

各クラス 2 チームずつ、計 4 チームで作業を行った。授業外での作業が多くなったが各クラスで協力をし、完成することができた。デザイン案から実際に構造を考え実際のものにしていく過程が有意義なものになった。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

完成した作品を大勢の方が触れ、触れた時のリアクションを生で見られた事がとても新鮮だった。特に外観の撮影や、作品の中で実際に楽しんでいる姿を見られた事が嬉しかった。

アートキャンプを終えて

実際に使う人の生のリアクションを見る事ができ嬉しかった。難しくも楽しかった作業の中で知識や経験と、得るものが大きい展示となった。

担当教員：豊田聡朗准教授

前期実習課題として「自然を楽しむための小空間」を原寸モックアップで制作。約 2.4m 立方の小空間を展示しました。今年は、雨の日が多くなかなか作業は捗りませんでしたが、皆な最後まで懸命に作り上げ無事展示に漕ぎ着けました。最後までやり遂げた彼女たちの心の強さは尊敬に値しますし、「逞しい心」の体現だと思います。アートキャンプ当日は、学生や訪れた方の休憩処となったり飛び入りで野点やコーヒーをいれて思い思いに楽しむ様子が印象的でした。

本部企画
本部企画

喜びへのプラスになる

プログラム内容

アートキャンプのテーマである「自然」をイメージし大きなドレスを制作した。作品と撮影や鑑賞をして、楽しんでもらった。また、スタンプラリーも開催し会場を盛り上げた。

プログラムメンバー

リーダー：3 年　浦春乃

小林一花　金子彌花　横濱沙耶　廣嶋奈々
米澤志織　山田美里　清水愛海　菊池春伽
長友美桜

制作時の様子、思ったこと

アートキャンプのテーマを元に何を作るか、行うかを一から考えて制作した。材料選別や作業方法が思い通りに進まず苦労はしたが、大勢で作業する事は楽しく、思い出が詰まった作品が完成した。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

女の子が作品と一緒に嬉しそうに撮影しているところを見て達成感と喜びを感じた。スタンプラリーも大盛況で、アートキャンプを盛り上げる事ができた。

アートキャンプを終えて

作品を一から考え、大勢で制作する事は大変ではあったが、実際完成した作品を大勢の方に見てもらったときはそれに勝る、大きな喜びがあった。

担当教員：高田三平教授

本部もプロジェクトに参加したいとの意向があり、作品制作をすることになった。本部長自ら先頭に立って少ない人数と限られた時間の中で高さ 2.5m の大きなドレスを作り上げた。このプロジェクトの狙いは参加者がドレスに顔を乗せ、聴衆が写真を撮ることで完結するというものだった。しかし雨に見舞われ、そこに登るまでのアプローチが少し危険だということでせっかく作り上げたドレスが目的通りうまく機能しなかったのが残念だ。条件が揃えばかなり面白いものになったはずだ。しかしながら、予算、人員、時間の全てが足りない条件の中で立派に作りあげたスタッフを讃えたい。

ライブペイント　少し変わった支持体で描く

プログラム内容

自然の中で様々な素材に自由にペイントをし、自然の中の絵画空間を楽しむことを目的とした活動を行った。

プログラムメンバー

リーダー：３年　稲葉成美

福島しおり　金保真奈美　菊池春迦　上妻美結
関口珠梨　関口舞　千田加奈子　弦弓楓　林里奈
本間果史　伏黒静流　室井莉子　柳優葉

制作時の様子、思ったこと

ペイントの準備として、寒冷紗を木の間にかかるカーテンのように展示するために縦に長く切ったものにスズランテープを通した。当日の様子を想像し不安な気持ちと楽しみな気持ち半々で準備をした。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

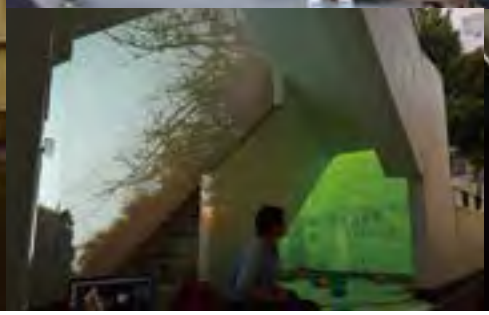
一日目は天気もよくのびのびと活動できた。二日目は悪天候のため室内で活動していたが、午後には雨があがり、二日間で描いた作品を無事外に展示することができた。ちょうど日も差し込んで、寒冷紗が光を通した様子がとても神秘的であった。

アートキャンプを終えて

二日目の土砂降りに心が折られたがプログラムメンバーのサポートや臨機応変な対応が非常にありがたく思った。天気に活動も気分も左右されてしまうのも外で行う醍醐味だと感じる。

担当教員：山藤仁准教授

今年度は、支持体に寒冷紗や白の養生シートなどを使って描いてみたので素材に対して少し変化があったかと思います。予算の問題もありいかにコスト低く抑えながら現場を設えるかを考えるのが難しかったと思います。寒冷紗などは農業分野で使われる物ですがこれに描くことで背景もすかして見ることもでき、思いがけない表情を見せる支持体になったのではないでしょうか。途中に雨が降ってきてしまい室内で布に描くワークショップに切り替えましたが、最後には外に展示し旗が並んだような風景になったことはとても良かったと思います。リーダーの指揮のもと、みなさんで取り組んだこの経験を今後にも活かしていただければと思います。



光を当てる

プログラム内容

自然をテーマにしたプロジェクションマッピングによる動画作品を投影。
ランダムで撮影・時間後とで見れる映像が変わっていく。

プログラムメンバー

リーダー：3年　江藤楓

古谷美保　庄司和奏　条生彩華　須貝日向子
田島璃子　出山瑛梨佳　細木夏野　本間果史
増田未来　山崎舞

制作時の様子、思ったこと

授業でやったことないことが多くわからないことが多々ありましたが先生や助手さんに細かく教えてもらいそれぞれ取り組むことができ、知識も身につけることができてみんなで楽しく行うことが出来ました。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

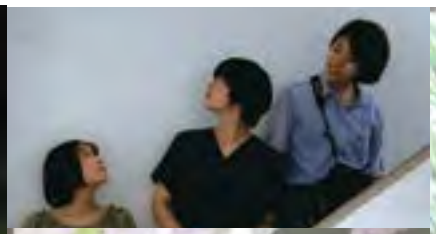
途中暗幕が外れたり雨が降ったり等ハプニングがありましたが暗くなるにつれはっきりプロジェクションマッピングが綺麗に映り、来ていただいた人達が楽しんでもらうことが出来たのでよかったと思います。

アートキャンプを終えて

造形表現のひとつの行事として行われるアートキャンプですが、参加することによって他学年、先生や助手さんと普段なかなか話せない人達と話すことができ、とても楽しかったです。また、普段あまり使わないプロジェクターを使ってのプロジェクションマッピングの投影は良い経験になりました。

担当教員：兼古昭彦教授

身の回りを見回してみよう。まずは目立つ場所や、役割を持った空間、意味を背負って佇む建物が目に入るだろうか。しかし逆に文脈などのない、いわば日常のヴォイドとしてある場所や空間もあることに気が付くだろうか？
多くの人が、毎日のように通る小道の非常階段の下など、気にしたことはないだろう。しかし、今回はそんなぽっかりと意識から抜け落ちてしまうような場所がターゲットとされ、新たな意味が生み出されていた。
アートは置き去りにされたもの、見落とされているものに光を当て、新たな価値や役割を与えることができる、そんなことを改めて考えさせられた良いプログラムだった。



デジタル　経験の引き継ぎに期待

プログラム内容

参加者に描いてもらったイラストで動物園、水族館を作る。「見て・動いて・楽しめる」体験型プロジェクト。

プログラムメンバー

リーダー：2年　関野水玲
安川茅波　大池龍子
高野璃々花　室内希美佳

制作時の様子、思ったこと

夏休み前から昼休みや放課後、休みの日に集まって制作をしてきました。初め５人で集まった時、どういったことがどこまで実現できるか全く分からない状態でした。宮本先生と話し合い方向性や、出来たらここまで出来るといいねといったボーダーを決め、いつまでにここまでやりたいといった目処を話し合って立ててから取り組みました。大まかに分けると映像と装飾の２つのやる事がありました。一週間後に集まるまでにやっておくなど工夫し、空いてる時間がバラバラなところも生かして活動しました。分からないことはプログラム仲間でお互いに聞き合ったり、先生に聞いたりなど積極的に行動できていたと思います。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

当日は沢山の人がきてくれ、子供から大人まで幅広い年代に楽しんでもらえました。メンバーはそれぞれ時間に集まり、計画通りスムーズに接客できました。思ったより絵の反映に時間を要したりしてしまったことが反省点です。しかし一日目の反省を生かして二日目にはより良いものを目指して協力して取り組めたので良かったです。

アートキャンプを終えて

今回２年２人、１年３人という少人数でプログラムに挑戦しました。まだそれほど知識のない私たちでしたが、やりたいと思ったことを実現できて良かったです。色々な方に協力を頂き、成り立ったプログラムでした。デジタルな射的やヨーヨー釣りなどの違う案も次年度にやってみたいです。

担当教員：宮本真帆准教授

今回のデジタルプログラムは昨年に1年生として参加した２年生と新1年生がタッグを組む編成が実現しました。経験が引き継がれながら新たな表現が生まれていくことには大きな可能性を感じます。 1年生もアイディア段階から積極的に参加してくれたことも収穫でした。また、これも昨年に引き続きですが、“ 来場者参加性 ”というワークショッププロジェクトの根幹とデジタルコンテンツの優位性が重なる面を、企画段階から本番中まで強く意識してくれたことが担当教員としてはうれしかったです。この流れ次回にも続くかな？

金工　「世界をぼんと鷲摘みにしてどんと出すだけ」

プログラム内容

1日目はメンバーによる鍛造の実践、2日目は鉄をもっと身近に感じられる体験として、S字フック作りや相打ち体験のワークショップを行った。

プログラムメンバー

リーダー：3年　清水瑠莉

深谷華子　小野寺ほの香　小林千夏　杉浦希美
五郎川絢香　平岩祐美　福留花菜　坂本千波揶

制作時の様子、思ったこと

デザイン等がはっきりしていなかったため当日はあたふたしてしまったが、皆で試行錯誤しながら制作し、形にすることができた。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

当日、ワークショップには小さな子供から大人まで多くの人が参加してくれた。硬い鉄が自分たちの手でどんどん変形していくのを見て体験した、十人十色の表情や反応、感想が新鮮だった。
また、並行しての作品制作は大変だった。

アートキャンプを終えて

最後の最後まで作品が完成するか分からず不安だった。先生や助手さん、周りの方々に助けてもらいながらなんとか形にすることができ、完成した文字を並べた時は達成感を得ることができた。楽しみながら鍛造をすることができた。

担当教員：押元信幸教授

この間読んだ小説に、芸術とは何だ?と禅の老師が問うシーンがあって、アートキャンプの学びだなぁと思った。
「芸術と云うのは、こりゃ社会だの、常識だの、そう云う背景があって、それと如何に折り合いをつけとるかと云う問題でしてな。
社会対個人みたいな図式がないと芸術にはなり難いようですわい。…」
さらに老師は作り手側について語る。「…禅匠は美しく造ろうと思ってなどおらん。芸術やろうとも思っていない。禅匠の造るものは説明でも象徴でもない、勿論理屈は要らん。絶対的な主観ですな。世界をぼんと鷲摘みにしてどんと出すだけでな。…」
『鉄鼠の檻（二）』, 102P, 京極夏彦 2005 講談社

作る、食べるがいちどに楽しめる空間

プログラム内容

トッピングのバリエーション豊富なかき氷の提供、陶器の器をベースにミニチュアの庭作り、カラフル石けん作りの子供から大人まで楽しめるワークショップを展開した。

プログラムメンバー

リーダー：2年　早川千晶

磯辺絵麻　三浦佳子　内田実玖
間宮桃香　藤田真生　築島良奈　川添理香子
横浜成美　出口佳子　猪野杏花音

制作時の様子、思ったこと

今年のしろくまは２年生２人・1年生９人で、ワークショップの準備は庭とせっけんで分かれて行ったのですが、積極的に計画や準備を進めることができました。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

ミニチュア庭づくりは、小さい子には難しいかなと思っていたのですが、思いのほか子供たちが真剣に取り組んでいて、その姿が印象的でした。しかしそれ以上に大人たちが本気で制作していました。せっけん作りは、カラフルなせっけんが子供たちに人気で、笑顔で持ち帰ってくれる姿が微笑ましかったです。

アートキャンプを終えて

11人で3つの企画の準備や運営をするのは大変で、2日間とも忙しかったです。しかし、協力して最後までやり遂げることができて、達成感がありました。

担当教員：豊田聡朗准教授

今年は、2年生2名1年生9名の大所帯のチームでプログラムが運営された。プログラムの趣向も3つに分け、(1) 石鹸作りワークショップ、(2) 小さなお庭の模型作り、そして (3) 最後まで天候を気にしつつ恒例のかき氷の提供を行った。
石鹸作りの班は、香り（アロマ）や色々な形ができるようにシリコンの製氷容器を利用、小さなお庭の班は陶芸の高田先生にお世話になり、お庭のベースを陶器で作らせてもらった。少しずつ色々な経験を重ね、今年の白くまも無事終えることができた。

織物

空の色

プログラム内容

織物プログラムでは、1日の空をイメージしたテントの制作、また、糸や布を編んでテントに虹をかけるワークショ ップを行った。

プログラムメンバー

リーダー：3年　木村くるみ

土屋いずみ　朝倉里菜　草野夏穂　斉藤穂乃香
佐藤百恵　柴崎未衣那　清水愛海　関口珠姫
高島菜帆　田部愛佳　長井凛乃　西久保リアン
花俣裕美　塙佳恵　廣島奈々　松嶋静来
三浦なるみ　矢島未悠

制作時の様子、思ったこと

織物では、木々に囲まれた空間に展示するテントを制作した。空をテーマに朝・昼・夜の３つのチームに分かれ、チームごとに何日も集まり、デザインを考え、素材を選び、パッチワークを中心に制作をした。どのチ ームも協力して制作し、それぞれの空を表現することができた。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

当日は７色の糸や布をかぎあみ・指編み・三つ編みにし、大きな虹をかけるワークショップを行った。参加者や来場者にも編んでもらい、みんなで虹を完成させることができた。

アートキャンプを終えて

今年は人数が多かったので、大規模な制作ができた。チームワークを大切に活動したことで、テントも虹も無事完成し、大成功だったと思う。

担当教員：大木敦子講師

今年の織物のプログラムでは１日の空の変化をテーマに、朝・昼・夜とそれぞれのチームに分かれて制作した。
メンバーが多く、意思決定に時間がかかる場面もあったが、３年生を中心に１・２年生も学年を超えたものづくりができていたように思う。
夏休み中も定期的に集まり、チームごとの活動を自主的に行えていたことは大きな意義がある。
朝焼けの光とグラデーション、緑の中を吹き抜ける昼の爽やかな風、夜の煌めく星々。そして当日のワークショップで雨を乗り越え虹がかかる。アートキャンプ２日間の空をまさに表現した空間が広がった。

染色　楽しい時間！

プログラム内容

染色プログラムでは藍染め体験を行った。紐や板で絞って、好きな柄を作る。染めた布を使用して、ブックカバーや栞、ポーチなど様々なものを作ることができる。

プログラムメンバー

リーダー：3 年　池田萌恵

坂本玲美　阿蘇暁音　飯岡夏希　大川瑞葉
川口萌々香　近藤鈴香　高橋美保　八反田茜

制作時の様子、思ったこと

事前に準備するものは去年と比べて比較的少なかったため藍染の実験に時間を取れた。どう絞ったらどのような模様が出るかなどをそれぞれ把握することができた。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

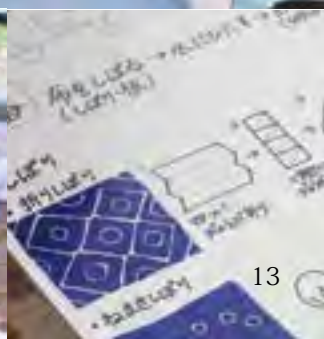
最初は接客にもたついてしまったところもあったが、なんとかやりくりできた。2 日間あわせて 100 枚の布を用意していたが、少し足りなくなるくらいたくさんのお客様がいらしてくださった。

アートキャンプを終えて

例年マーブル染めをしていたため、どのようにしたら効率が良いのか等わからなかったが、何とかなって良かった。楽しんでいただけるか不安であったが、出来上がった作品を見てとても嬉しそうにしていたり、楽しいと言ってくださったのでとても安心した。

担当教員：早瀬郁惠准教授

藍染めは、空気に触れると緑色から藍色に変化する発色が神秘的である。また、板や紐で絞った布は、広げるまでどのように染まっているのか分からない。そこが面白くてドキドキ、ワクワク、楽しい時間となる。楽しさを多くの人と共に味わうには、どうすればいいのか、素材や道具について考えなければならないことがたくさんある。話し合いを重ね、実際にやってみることで、様々な問題を解決して、やり遂げることができた。皆で時間をかけて取り組む大変さと大切さを学ぶことができたのではないだろうか。



陶芸　「焼く」の原点に立ち返る

プログラム内容

講師の新倉先生による、縄文文化についての講演会や、箸置きの絵付け体験を開きその場で焼いて体験者にプレゼントを行った。2日間、制作したドーム型のはにわに、キャンドルライトを入れライトアップをした。

プログラムメンバー

リーダー：3年　長倉彩子

沢田都美　杉田麻美子　田中愛里彩　土田紫温
本田明日香　山田詩音里

制作時の様子、思ったこと

今年のアートキャンプのテーマを連想させるようにはにわと箸置きのモチーフをつけたことが楽しかった。陶芸に関して初めて学ぶことが多く、非常に勉強になった。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

1日目の講演会で、新倉先生のユーモア溢れる講義を受けることができた。2日目は絵付け体験のため多くの方が集まったことで、和気あいあいとした雰囲気でプログラムを進めることができた。

アートキャンプを終えて

野焼きが中止になったことは残念だったが、新倉先生による講演会で普段は聞けない話を聴け、非常に興味深かった。また、雨天にもかかわらず大勢の方が絵付け体験に来て完成した自分に箸置きを持ち帰っていく様子に嬉しさと達成感を感じた。

担当教員：高田三平教授

陶芸において「焼く」というプロセスは最も重要な事柄だ。だが今はスイッチ一つで簡単に電気が焼いてくれ、釜を開ければ焼き上がっている便利な時代だ。はたしてそれでいいのだろうか。原点に立ち返り「焼く」意味を探り、考え、体験する必要性を強く感じる。そこで縄文の野焼きと楽焼を陶芸プログラムに組み込んだ。（残念ながら野焼きは消防の許可が下りずに断念した。）そして群馬県立埋蔵文化財調査事業団の新倉明彦先生に縄文文化についての講演をお願いした。学生たちのアイデアで事前に焼き上げたものを展示し、ワークショップで楽焼をやり、参加者に絵付けをしてもらい、その場で焼き上げて渡すようにしたところ大盛況だった。学年の足並みが揃わず苦労したが、当日はチームワークよく協働できたようだ。

森の
サロン

森の中で風を感じてダンスする

プログラム内容

「森のサロン」にて2、3歳の親子対象で行なっている週末サロンをアートキャンプと同時開催した。
ダンスカンパニー Nomade~s さんを講師に迎え、親子で楽しめるダンスのワークショップを企画した。

講師

DANCE COMPANY　Nomade~s

制作時の様子、思ったこと

場所の設定や使い方など、講師の Nomade~s さんと相談しながら進めた。森の緑や風を感じながら踊るための仕掛け（衣裳や装飾）についても2、3歳の子どもたちの様子を思い浮かべながら提案してくださり、スタッフもとても勉強になった。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

当日はあいにくの雨だったが、空の様子を見ながら室内と野外を行き来しつつダンスを楽しむことができた。午後は学生さんの企画するワークショップにも参加し、アートを体験できたようだ。

アートキャンプを終えて

自然のなかで身体を使ってあそぶことは、子ども時代に体験してほしいことのひとつだ。学生さんの作品に囲まれながら、雨を感じて踊る体験は子どもたちの記憶を彩ったのではないだろうか。衣裳をまとうと、おとなも子どもも不思議と走ったりくるりと翻ってみたり、身体が動いてしまうことがとても面白い発見だった。

森のサロンスタッフ：清水 幸

自然の中でのびのびと身体を動かし踊ってみたい！という思いから、今年はダンスのワークショップを企画した森のサロン。
講師として来ていただいた DANCE COMPANY Nomade~s さんと会場となる野外の環境を確認しながら、内容について打ち合わせを行いました。衣裳や装飾についてのアイデアや、ダンスが初めての親子でも楽しめるような演出を考えていただき迎えた当日。あいにくの空模様でしたが、おとなも子どももひらひらの衣裳を身にまとい、蝶になったり、少し雨に打たれながら風を感じて輪になったり、こころも身体も解放して楽しむことができました。

たいへんだったけど満足！よくやった Calamity Jane！

スペースデザイン

プログラム内容

22 号棟のデッキに「WEST SIDE」をテーマとしたカフェを運営。 5日にはドリンクとお菓子を、6日にはドリンクと釜焼きピザを提供。

プログラムメンバー

リーダー：3 年　永野里奈
芦刈奏子　飯田彩果　飯塚莉子　今村朱里
大塚実穂　小川千夏　片山未唯　北村真弓
國見圭奈子　兒玉実咲　宍倉恵美里
清水彩里　新村美奈　須藤明紗　関野水玲
平松優里　藤井佐吉子　村木真帆　山本茉依
藁谷泉月

制作時の様子、思ったこと

22 名のメンバーでミーティングを繰り返し、カフェのテーマ・作りたいものを決めた後、3 年生中心となって図面の制作を行いました。壁の1つもないデッキからカフェを完成させるまでには沢山の時間を要しましたが、それにも増して大きな達成感を得ることができました。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

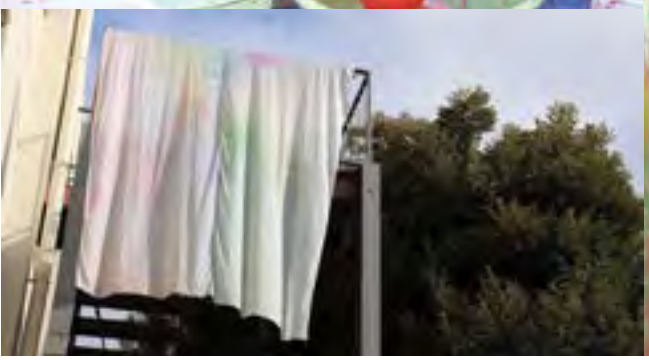
1 日目・2 日目の後半は天気が良く、カフェに心地の良い光が差し込んでいました。来てくれたお客様は飲み物・お菓子・窯で焼いたピザを手に取り、窓から見える憩の広場の催し物を楽しんだり談笑をしたり…と各々思うように時間を過ごしていました。

アートキャンプを終えて

自分達で一から制作したカフェで実際に食べ物を提供し、お客様がくつろいでいる姿を見て、カフェを作り上げた時とはまた違う達成感を味わうことができました。また、直接お客様からお褒めの言葉を頂くこともあり、空間を通じて誰かの心を動かすことが出来たことは、貴重な経験となりました。

担当教員：手嶋尚人教授

今年でアートキャンプでのカフェ参加は5回目となるが、1 からのスタートとなった。これまでのカフェを一度解体し、デッキのみを残した。とても大変で夏休みもかなりの日数を建設に費やした。その分、サークルの団結は強まった。リーダーの 3 年生たちも常に誰かがその日の作業の中心となり、よく連絡も取り合っていた。今年のテーマは「ウェスタンカフェ」。 1からつくれたことで、思い通りの空間がつくれたのではないだろうか。内装の細かい演出なども手分けしながら仕上げた。大変だった分、チームワークもよかった。今年の 2 年生が来年はリーダー学年としてどんなカフェが登場するか楽しみである。



にじのかくれんぼ

笑顔あふれる虹色のアート

プログラム内容

地面に巨大な真っ白のキャンバスを広げ、階段の上から色とりどりの水風船を落としてもらうことで、真っ白のキャンバスが虹色になっていく様子を楽しんでもらう。

プログラムメンバー

リーダー：3 年 田邊悠子

日高理緒　川田詩織　最明治紀香
花房由衣　吉野さくら

制作時の様子、思ったこと

水風船をしたことがないメンバーもいたので、私たち自身が遊びの楽しむことからはじめた。そこから子供たちにどうやったら楽しく水風船で遊んでもらえるかを議論しました。その他にもどのような素材のキャンバスにするか、どうやって展示するかなどいろいろな方面からメンバー全員で考えていきました。色々話し合う中でも実際にやってみないとわからないことが多く、実験の重要性を感じました。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

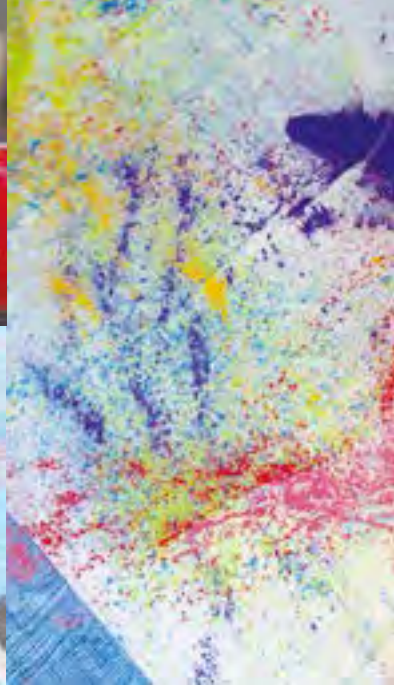
当日は子供たちの笑顔をたくさん見ることができました。特に印象的だったのは水風船を落として割れたときの嬉しそうな顔でした。また、中にはリピーターも現れ、体験できない非日常を提供できたのではと思います。

アートキャンプを終えて

準備を含めて約半年をかけたプロジェクトができて安堵しています。メンバー全員で取り組むはじめてのワークショップだったこともあり、より仲を深めることができたと思います。当日はこどもたちのたくさんの笑顔を見ることができ、メンバーにとっても楽しい時間になりました。ここで得た経験をさらなる飛躍へつなげていきたいと思います。

担当教員：児童教育学科　結城孝雄教授

今年も、昨年に続き破裂する風船のパフォーマンスを実施しました。学生の意見で、絵の具が飛び散った布を使い、影絵遊びを付け加える案が出され、試みることにしました。昨年、紙の支持体では絵の具の水たまりができたので、布に変えて色の鮮明さを表したいところでしたが、実験をくり返したなかで鮮明な色だけを残すことは至難の技でした。作品を木枠に張り、ライトを照らすという提案は、思ったより色と身体のシルエットが浮かび上がり、面白い感じになりました。今回は様々に工夫と発想を楽しむ活動ができたように思います。実行委員の皆さん、ご担当の先生方、準備など環境設定をしていただきありがとうございました。



一喜一憂も醍醐味

プログラム内容

使用画材は、棒のチョークではなく粉チョークを使用。布をキャンバスにし、粉チョークで描いてもらい、棒のチョークでは出すことが出来ない独特な模様を楽しむことが出来たと思う。

プログラムメンバー

リーダー：2年　武井梨沙

五十嵐愛里　阿美百合子　飯泉アニタ　宮田理沙

制作時の様子、思ったこと

学内のどこでプロジェクトを開催するか、布に粉チョークがよく付くようにするにはどうするか、など学年を越えて、たくさんのコミュニケーションがとれたことを嬉しく思う。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

2日目は悪天候のためプログラムができず、1日目のみの開催となった。短い時間であったが、たくさんの人がチョークアートを体験しに来てくださった。

アートキャンプを終えて

粉チョークは使ったことのない素材だったため、どんな表現ができるのか何もわからない状態から始まったプロジェクトだった。少ない予算の中「どこを切り詰められるか」を考え、身近にあるもので代用したり、案を出し合い、当日も仲良く笑顔でこのアートを私たちなりに楽しめたのではないかと思う。

担当教員：宮本真帆准教授

今年のアートキャンプは2日目が天気に恵まれず、完全な屋外プロジェクトだったチョークアートプログラムは開店休業状態を余儀なくされた。しかし、不可抗力な状況に一喜一憂するのもまた、言って見ればライブイベントの醍醐味だ。そして具体的な課題の発見でもある。そういう意味ではよい経験になったと思う。次回はすべてのプログラムで天候不良時の対応を準備できることに期待する。チョークアートの皆さん、本当にお疲れさま。

パンケーキの妖精現る！

プログラム内容

カラー生地を用いてカラフルで自由なアートを自分自身で表現してもらった。好きな色を選んでもらい、その色で　焼くパンケーキに絵を描いた。

プログラムメンバー

リーダー：２年　冨岡沙江子

福永玲季　枇杷阪莉乃　高橋牧子　寺坂由希菜
松戸柚奈　久川香織　原田もなみ　矢澤知穂

制作時の様子、思ったこと

去年も同じプログラムが開催されていたため、去年のパンケーキアートとどう違いをつけるか考えた。その結果、色を付けたパンケーキを作ることにした。試作をした時、絵を描いた部分が分からなくなったり、焼き加減が大変だった。それでもグループの中で時間が会う時に集まったりと頑張った。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

予想よりも多くの人がプログラムに参加してくれた。５歳くらいの子や、お年寄りの方も来てくれた。パンケーキが焼けるまでにお話してコミュニケーションが生まれ、出来上がった時も喜んでくれてとても嬉しかった。

アートキャンプを終えて

去年も開催されていたプログラムであったため簡単だと思っていたが、自分達の学年しかおらず、やることもたくさんあり大変だった。当日までたくさんの苦労があったため達成感も大きかった。参加して本当に良かったと思う。

担当教員：岡本恵助教

参加者がチョコレートのパンケーキ生地で焼いたあとにカラー生地を流し込みパンケーキを作った。生地は焼くと茶色に変色するため、焼く時間、厚さなど何度も練習し検討した。室内ということもあって２日目の雨の中、予備の生地もなくなるほど大勢の人で溢れていた。テーブルのカラフルなオーナメントツリーもパンケーキ、室内装飾にはガーランド、黒板アートとカラフルであたたかい空間になった。同じＴシャツを着ることによりチームが結束したように感じた。何が自分で出来るかをそれぞれが考え、アイデアを出しあっていたのも印象的であった。

世界を切り取ることのススメ

プログラム内容

“フレームアート”とはフレーム（額縁）を通してアートを発見するプログラムです。お好きなフレームを選び、そのフレームを使って写真を撮ります。なにを、どこを、フレームの中に飾るかはあなたの自由です。フレーム通してみると、いつもの世界が面白いアートの世界に変わるかもしれません。

プログラムメンバー

リーダー：2年　内堀彩香

植木千尋　池上ひかり　植田菜月
加藤千春　小池亜実　塩坂彩乃

どうしてその内容で参加しようと思ったのか

フレームを使って写真に残すものを意識して探した先に、その人がその人の感性で見つけたアートがあると思い、そのことにより身近なアートの存在に気づいてくれると思ったからです。

制作時の様子、思ったこと

フレームの材料は主に授業で余っていた木材や廃材です。作品を飾る脇役的意味のフレームというより、作品としてのフレームを作ることを意識しました。作って終わりではなく、当日使われることによって新たなアートに生まれ変わると思うとワクワクしました。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

参加者の方に好きなフレームを選んでもらい、写真撮影をしていただきました。自分には思いつかなかったフレームの使い方や写真の撮り方など、その人特有の発想や感性を目の当たりにし、新鮮な気持ちとなりました。

アートキャンプを終えて

フレームアートの概念がより広がったと考えています。フレームアートはアートを見つけるきっかけに過ぎないので、その先には私たちが気づいていないもの・ことがまだまだあると感じています。アートキャンプの以外の活動として、撮影した写真の展示会や大学を飛び出した”まちなかフレームアート”などの計画もあります。活動を広げる中でアートの新たな楽しみ方をどんどん見つけていきたいです。

担当教員：曽根博美准教授

フレームアートチームは自分がつくるだけでなく、来場者に好きなフレームで写真を撮ってもらうことでアートに参加させてしまうという、メタ・プロジェクトを行いました。とてもポジティブで制作エネルギーにあふれたチームで、メールアドレスを取得したりQRコードを用意したりする、それぞれの担当業務分担がなされているなど、現場も良くオーガナイズされていたと思います。四角い缶バッジにはフレームアートというコンセプトへの自信とか愛が感じられました。来場者が撮った写真による展示もアフター企画として行うなど、広がりのあるプロジェクトになりました。

森のアートクリニック

来場者の癒やしの場に

プログラム内容

あるモチーフを描いてもらい、その描き方や特徴から性格診断を行うワークショップと、大きな紙をテントや床に貼り、自由に絵を描いてもらう参加型ライブペイントを行なった。また、性格診断中にメンバーが参加者の似顔絵を描きプレゼントした。

プログラムメンバー

リーダー：2年　関田あみ

宮澤鈴香　神岡真帆　田中優衣　水村友香

制作時の様子、思ったこと

直前に全ての事を進めたのでドタバタしてしまったが、当日は準備万端で迎えることが出来てよかった。オリジナルの心理テストも作ってみたいと思った。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

2日目は列が出来るほどたくさんの方に参加してもらえた。子供たちもお母さんも学生も、みんな似顔絵を喜んでくれていた。ライブペイントでは子供たちが白衣を着て夢中でお絵描きしていた。幅広い年齢層の人が楽しめるプログラムになって嬉しかった。

アートキャンプを終えて

何か嫌なことがあった時は昔からアートに触れたり、絵を描くことで癒されることが多かったので、今回のプログラムで普段絵を描かない人にもアートの楽しさが伝わったら良いなと思った。病院のプログラムと聞いて、最初はハテナを浮かべていた人が多かったが、その趣旨が伝わっていれば嬉しいと思った。

担当教員：曽根博美准教授

アートクリニックチームはやりたいことをやりきったのではないでしょうか。似顔絵を描く、描画による心理テスト、色による心理診断など、メンバーが生き生きと楽しみながらすすめており、来場者との対話が生まれ、思いがけない癒やしの場になっていたと思います。似顔絵は子どもから教員まで様々な人に喜ばれていたし、心理診断はあたると評判でした。

クリニックをやりたいというワンアイデアからスタートしたプロジェクトでしたが、細部に手を抜かずに進めていったことで、様々な人と関われる場所を作り出せていたと思います。

トリックアートの面白さが伝わった

プログラム内容

巨大なトリックアートの制作・展示のほか、ワークショップでは紙とペンでできる簡易的なトリックアートを行う。平面から生み出される立体的で不思議なトリックアートをお楽しみください。

プログラムメンバー

リーダー：2年　南明日佳

三宅利奈　村田美穂　芳尾咲季子

制作時の様子、思ったこと

夏休み前から作る作品について話し合いを重ね、制作に取りかかった。
立体的に見えるように試行錯誤し、意見の食い違いや予想だにせぬトラブルにも見舞われたが、やりがいがあり楽しむことができた。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

初日は場所が悪く人が訪れず、移動した。展示の絵が急遽ライブペイントになったが、風が強く大変だった。ワークショップでは小さなお子さんや年配の方まで体験していただき、楽しんでもらえたのが嬉しかった。

アートキャンプを終えて

当日の天候が悪く、トラブル続きで難航したが、怪我もなく、無事に終えれたことが何よりだった。反省点を踏まえ、また参加出来たらなと思う。

担当教員：曽根博美准教授

トリックアートチームはメインの絵を描くのが時間との戦いでした。描画する布が大変大きく、作業場も思うようにならないなか、諦めず最後まで描き続けましたね。場所選びもどこでも良いというわけにはいかず、大変だったと思います。
トリックアートの醍醐味は鑑賞者が錯視によって驚いたり、困惑したりしつつ視覚のトリックに気付くところにありますが、その良さは２日目にワークショップが開催されてより強く伝わったと思います。ワークショップはとても良くプログラムされていると感じました。そんなところからも、今後の活動につながる可能性を感じてもらえたらと思います。

cocoon　自然の中の心地よい空間

cocoon

プログラム内容

cocoon は森の中に現れた繭のベッドに包まれて、自然を体感できるプログラムだ。木々のきらめき、風 の流れ、鳥の声 ... 普段何気なく触れ合っている自然を、少し違う視点で見つめることができる。

プログラムメンバー

リーダー：3 年　長廻美穂　中川里奈

制作時の様子、思ったこと

制作のスケジュールは当初の計画よりも滞った。リーダーと副リーダー両名とも二人という少人数での制作の経験がなかったため、目測を誤った。特に当日直前 5 日間ほどはかなり負担の大きなスケジュールとなった。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

来場者の方からは制作時の想定とは違った反応や行動が見られたが、概ね円滑に運営できた。また、多くの来場者の方から想像を大幅に上回る好評を賜り、メンバー一同達成感に満ちた 2 日間であった。

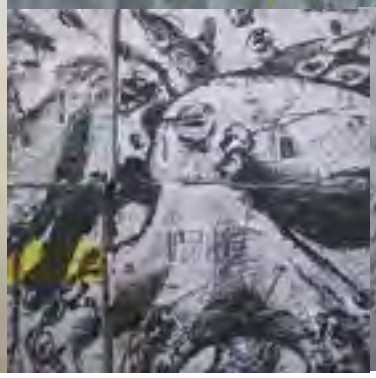
アートキャンプを終えて

予算の計画から始まり、設計、制作、運営の計画まで全てを二人で協力して行ったため、役職にとらわれない責任感を持てた。いい意味で緊張感のある、学びの多いアートキャンプになった。

担当教員：曽根博美准教授

初めに提出されたイメージからやや変遷はありましたが、ほぼつくりたかったイメージに近いものができたのではないかと思います。材木入手から加工、組み立て、繭部分の制作、そして設置と当日の運営まで、たった二人でよく頑張ったと思います。二日目が雨天のため中止になってしまったのが残念でした。

このプロジェクトは家政大キャンパス、そしてアートキャンプに設置するのに適した、場所の特性をとらえたサイトスペシフィックなインスタレーションだと言い切れます。子どもたちも喜んで遊んでいましたが、大人が瞑想したり、緑との一体化を感じたり、様々な可能性を持った作品です。



レシートアート　時間と手間を注いだ労作

プログラム内容

レシートの熱反応を利用して絵を描く。すぐ捨てられてしまいがちなレシートに日常があると捉え、手芸用アイロンの熱で今回のテーマである自然を表現した。

プログラムメンバー

3年　池田未来　伊藤奈美

今回初めてプログラム参加した理由

自由に表現できるアートキャンプの場を借りて普段できないことをしてみようと2人で企画しました。様々な案が出ましたが、身近な素材であるレシートの特性を知り、実際に試してみることに決めました。

制作の様子、思ったこと

レシートを一枚一枚貼るのが意外と大変だったり、初めて扱う手芸用アイロンで描いていくのがかなり難しかったです。試行錯誤し、制作のなかで成長していくことが出来たと感じます。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

見に来て下さった方が不思議そうに尋ねてきてくれたり、時々触れてもらったりして、作品を通してコミュニケーションをとることが出来ました。普段、作品制作の過程を見られることはあまりないので自分たちにとっても刺激になりました。

アートキャンプを終えて

2日目は雨で残念でしたが、全体的に盛り上がっていて良かったです。レシートアートは2人という小さなプログラムでしたが貴重な体験になったと思います。そしてレシートを寄付してくださった皆様ありがとうございました！

担当教員：曽根博美准教授

一見地味に見えますが、膨大な数のレシート集め、貼り込み、そしてアイロンによる描画と、時間と労力を必要とするプロジェクトでした。それでも、レシートアートをやってみたいという気持ちを維持して実現させることができました。箱に貼るというアイデアによってパズルや彫刻作品のような効果も出ましたね。大きな壁面にレシートで絵を描くというのも良いですが、今回の作品は自立した立体だったからこそのユニークさが出せたと思います。溜め込んだレシートに秘められたメンバーＩさんの歴史の上に海の生き物が熱で描き出されていくようすは感動的でした。

服飾美術学科
被服構成システム研究室

空間を彩る布づくり

被服構成システム研究室
卒業制作ゼミ

石井彩子　白岩優佳　髙草木知夏　加藤瑞稀
木村夏美　寺岡朋音　藤田さくら　板倉日向子
伊藤由里加　栗田春花　諸橋月乃　山田美沙輝

担当教員：服飾美術学科 田中早苗准教授

昨年からアートキャンプに参加させていただきました。卒研生 12 名を2グループに分けて制作させました。当研究室において、“空間を彩る布づくり”には3つのねらいがあります。1つめは、衣服以外の造形に慣れていない学生に、眠っている脳細胞を働かせて知恵を絞っていただくこと。2つめは、卒研は個人作業ですが共同作業を通して後の研究活動やファッションショーで協力し合えるようになること。3つめは、ドレス制作の残り布の再活用と布の性質や裁ち目始末を考えさせることです。後期はじめの“空間を彩る布づくり”は絶好の機会でした。

芸術学ゼミ

コミニュケーションの試み

プログラム内容

美術を介した心の変化に興味を持つ芸術学ゼミ生が、マインドマップとファシリテーショングラフィックを仲介に、来場者と意見交換をし、自分の表現と他人と意見交換することでどのような効果があるのかをみた。

今回初めてプログラム参加した理由

美術は社会にどんな役割があるのかという問いを、色々な方と話し合いたくて始めた。考えを共有したり話しあうことで、ゼミの研究結果を深められることができ、加えてアートキャンプに、このようなプログラムがあっても面白いのではないか、と思い今回参加をした。

プログラムメンバー

4 年　加藤 唯

制作時の様子、思ったこと

ゼミでの研究内容を模造紙にまとめたものや、課題のマインドマップ、コラージュ等の作品を作った中で、特に研究結果を模造紙にまとめることに力を入れた。メモでまとめていたものをファシリテーショングラフィック (はなしを見える化することで、場の活性化や相互理解をうながす技術) に直したり、伝えたいことに、矛盾や足りない根拠がないように調べる作業が大変だった。まとめきったときは、美術の意味を自分なりの解釈で納得することができ、改めて美術が好きになった経験になった。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

最初の方は知り合いなどが来てくれて話を聞いてくださり嬉しかったが、美術に対する意見が聞けず、また先生方や他の生徒さんは来てくださらなかったのが残念だった。少しだけ美術の意味を考えてきた者としては、もう少し多くの人と一緒に考えたかった。

アートキャンプを終えて

やりたいことをやり尽くすことができ、良い体験になった。他のプログラムさんの体験にも参加することができたし、これからも、美術を生活に取り入れて、豊かな時間をつくっていこうと思う。

担当教員：曽根博美准教授

このプログラムは、今年始まったばかりの芸術学ゼミを代表し、加藤さんが立ち上げたプロジェクトです。私が関わった学外での展覧会に来てくれた際、会場で来場者に話しかけてコミュニケーションするという京都市芸大の女性作家に出会い、触発されたということを言っていましたね。ひとりで正面から行き過ぎる人に話しかけていくということ自体、とても勇気のいることだったと思います。行動すること、コミュニケーションすること、アートについて対話すること、について純粋に接近したプロジェクトになったと思います。

附属中・高

色とりどりの傘の世界へようこそ

東京家政大附属中・高

プログラム内容

ポルトガル中部の街、アゲダで毎年７月に開催されている「アンブレラ・スカイ・プロジェクト」をここ、アートキャンプでも！
ビニール傘に思い思いのアートを施し、空にたくさんぶら下げ、色鮮やかな景色をつくりあげた。

プログラムメンバー

東京家政大学附属女子中学校・高等学校
アドミッションスタッフ一同

担当教員：渡辺健教諭

今年もお誘いをいただきありがとうございます。
私たち東京家政大学附属女子中学校高等学校のアドミッションスタッフは、中学生16名、高校生２１名のメンバーで、普段は各部活動で頑張り、説明会や外部のフェスタで母校愛を持って積極的に活動をしています。
今年の作品は「アンブレラ・スカイ・プロジェクト」でした。中高事務室勤務で造形表現学科２０１６年３月卒業の三木愛子さんのプロデュースで細やかなご指導をいただき完成できました。大学の先輩方と一緒に参加できる貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

ガ イ ド

子どもたちとの絆が生まれる１日

アートキャンプガイド

プログラム内容

アートキャンプに参加した高校生、外部の養護施設の子供たち、森のサロンの子供たちとガイドとして各プログラムのワークショップ等に参加し、一緒にアートの楽しさを体験するお手伝いをした。

プログラムメンバー

リーダー：３年　霜鳥結

廣井美希　阿左美星　有田りこ
井瀧錦　岩端紗也

制作時の様子、思ったこと

今回、準備は景品と各ワークショップの注意事項を確認するのみだったので、比較的負担が少なく行うことができた。

アートキャンプ当日の様子、思ったこと

少人数だったので、子供たちをまとめるのが大変だった。養護施設の先生方もついて下さったが、子供たちの命を預かる役割でもある為、高学年が多ければ多いほど先生方も安心できると思った。

アートキャンプを終えて

今年度のガイドは人数が少なく、２日目の活動だけになってしまったが、外部の養護施設の子供たちと楽しく過ごすことができ良かった。

担当教員：曽根博美准教授

２年目となったアートキャンプガイドは、昨年の経験者２人に１年生４人を加え、ドキドキして子どもたちを待っていました。やってきた子どもたちには、昨年も来てくれた子が何人もいて、昨年のことをそれは良く覚えていましたね。子どもと接するのが苦手な人、得意な人、みんなそれぞれに子どもたちとの濃いふれあいの時間を持ったことでしょう。今年も子どもたちは目一杯アートキャンプを楽しんでいってくれました。また来年も来てくれたら、今年のことを楽しかった時間として良く覚えているのではないでしょうか。ガイドのみんな、真摯にガイドをつとめてくれてありがとう。

プログラムメンバー
着用Ｔシャツデザイン
© よしだのえる

炊き出し

令和のアートキャンプの夜ごはん

プログラムメンバー

大西ゼミ

高島海咲　田澤有紗　石渕みつき

木村ゼミ

川島紗耶　島崎望　森瑞歩　渡邉麻菜美
安済美咲　佐藤由希　角田紗都美　寺山由花
萩原もえ美　廣谷優花　吉岡里紗　太田里佳子
林優香　山下菜穂　吉田紗都

学生の感想

栄養学科2年管理栄養士専攻　田澤有紗

今回ご飯作りには途中から参加させていただきました。材料をみじん切りにしたり、素揚げにしたりと、丁寧に調理を行いました。サラダに使うニンジンを大量にせん切りしたことが思い出です。時間通りに皆さんのもとに届けることができ良かったです。皆さんに喜んでいただけて嬉しく思います。

栄養学科2年管理栄養士専攻　高島海咲

夜配られたお弁当はいかがだったでしょうか？
いつもの調理実習とは異なり、給食のように数が多く衛生的にもより気をつけなければならず大変でしたが、やりがいがあり実りある炊き出しでした。また、先生方や、先輩方と楽しく作業ができ良かったです。

担当教員：栄養学科　大西淳之教授

昨年に続いて２度目の参加でした。当初,「食リンピック」メンバーと研究室の卒論生の参加人数が少ない状況に焦りましたが、当日は強力な造形表現学科の学生助っ人のおかげで無事に「辰五郎弁当（仮名）」をお届けすることができました。今年も調理指導・監修は土屋京子先生にお願いし、栄養学科と造形表現学科の特性と好みが、いい具合に盛り込まれた味付けをお楽しみ頂けたのではないかと思います。ありがとうございました。

担当教員：児童教育学科　木村博人教授

令和元年のアートキャンプも無事に(?)終了した。2012 年から始まったこのプロジェクトも今年で 8 年目になり、年号も新しくなった。開始当初はアート活動のベース造りとして食と住を支えてきたが、この 2、3 年は夕食作りから少し離れ、夜食作りを担当することになってきた。
令和初の夜食は、ダッチ・ド・ローストチキン 40 人分、ポテトとコンビーフ炒め 30 人分、焼きそば 40 人分、フルーツポンチ 50 人分だった。参加者すべてに全種類食べていただくことはできなかったことが残念である。
来年はもっとたくさんの人を満腹にできるようにしたいものだ。

ステージ発表

Nuts
ジャズ研究会
アコギな時間
フラダンスサークル　～ PuaLani ～
軽音部

当日の写真

おわりに

アートキャンプは年に一度の造形表現学科をあげてのビックプロジェクトだ。
今年は 24 ものプログラムの参加があり（これは例年より 10 プログラムも多い）盛況を呈した。
2 日目は午後まで雨にたたられ、屋外での作業が困難な状況に陥ったが、学生も最後まで集中を切らさず、頑張って乗り切った。
そんな中で他学科の栄養（大西先生）、児教（木村先生）、結城ゼミや森のサロンの参加・協力は今ではなくてはならない存在となり、心から感謝申し上げる次第だ。
今年は、1 年生も多く参加して、上級生とコミニュケーションをとり協働するという理想的な環境に近づきそうだったが、現実は学年の授業の空き時間が異なり、中々一緒に作業をすることができなかった。プロジェクトにとって大切な要素をもう一工夫して、より良いプロジェクトにしてゆきたいと思う。

造形表現学科アートキャンプ担当
高田三平教授

今年のアートキャンプの本部長は、二人体制で務めさせていただきました。
今年は、参加プログラムも例年より多く、当日も大きな盛り上がりをみせました。いまは、両日とも大きなトラブルなく無事に終えることができ、安堵の気持ちでいっぱいです。
当日無事に成功することができたのは、本部の皆さんをはじめ、先生方、参加してくださったプログラム皆さんのがんばりがあったからです。
この貴重な経験をこの先にも活かせるように、これからも充実した学校生活を送っていきたいと思います。

アートキャンプ 2019　本部長
浦春乃　小林一花

アートキャンプ 2019　本部メンバー

学生

阿美百合子　飯泉アニタ　飯塚月野　飯室晴香　五十嵐愛里　伊藤奈美　浦春乃
小野寺ほの香　勝茜音　勝俣かのん　金子彌花　岸本彩加　北山美沙稀　木村彩香
草野夏穂　小林一花　清水愛海　清水香奈　千場里穂　高橋美保　武井梨沙　長友美桜
鳴海結　八反田茜　廣嶋奈々　伏黒静流　松嶋静来　松田実怜　山田美里　横濱沙耶
芳沢美凪　米澤志織　米田あかり　渡邊宥日

教員

高田三平 教授　曽根博美 准教授　有馬十三郎 教授　岡本惠 助教　栗山由加 期限付助教

期限付助手

五十嵐彩歌　寺嶋由葉

報告書制作を振り返って

32 ページの冊子はパラパラとめくって一読すると、さほどページ数が多く感じられないかもしれない。ところがデザイン作業における写真や文字などの配置作業は、見るだけに比べると、とても大変で膨大な時間がかかる。今回このデザイン作業を担当した学生はこの体験によって普段の課題作品とは違った習得があったかと思います。

報告書指導教員
有馬十三郎教授

アートキャンプが終了してから本番となる報告書制作のスタッフはスケジュールも厳しい中、モチベーションを保つことが難しかったと思います。デザインや文章、写真選びやレイアウト、編集作業にはいろいろな力が必要でしたね。報告書制作を通じて一人一人が何か見つけてくれていたら嬉しいです。
この報告書が将来皆さんの宝物になりますように！

報告書指導教員
曽根博美准教授

皆さん、改めてアートキャンプお疲れさまでした。今回報告書作成にあたり、本部のメンバーはもちろん、先生方や各プログラムのリーダーさんなど、たくさんの方にご協力いただき、作り上げることができました。造形表現学科ならではのアートイベントの運営、冊子制作に携わることができ嬉しく思います。ありがとうございました。

編集長　3 年 芳沢美凪

報告書制作メンバー

3 年：芳沢美凪　伊藤奈美　勝俣かのん　岸本彩加　山田美里　渡邊宥日
2 年：阿美百合子　五十嵐愛里
指導教員：有馬十三郎教授　曽根博美准教授

アートキャンプ 2019　報告書
編集　アートキャンプ 2019　報告書制作スタッフ
発行日　2020 年 1 月 30 日
発行所　東京家政大学 家政学部 造形表現学科
〒 173-8602　東京都板橋区加賀 1-18-1
印刷・製本　株式会社美創企画

ART CAMP 2019

東京家政大学 家政学部 造形表現学科 2019 アートキャンプ報告書